

セイヨウミツバチによる蜂針療法

太田 直喜

1979年10月、深沢、太田の発案によって世界に先駆け日本蜂針療法研究会が誕生した。その後、韓国(1983年)に続き中国、東南アジア諸国、アメリカなどの国がそれぞれに研究会を創立し1991年11月、中国連雲港市蜂療病院(ミツバチ生産物、蜂針のみを病気治療手段とする専門病院)院長、房柱医学博士の呼びかけで国際蜂療保健蜂針学術研究会が中国済南市で結成された。わが国も含め18か国の参加を得て1993年第2回大会を南京市で開催、本年11月には中国杭州市において第3回の国際大会開催が決定している。わが国に始まった蜂針療法研究の灯は今や国際的な灯の輪となり今後ますます拡大されることが期待される。

わが国においては研究会創立以来、年2回の研究研修会を開催し、蜂針による適応病症の情報交換、治病技術のレベル向上を目指し近代医学の盲点とされるリュウマチ、ヘルペス性疾患、その他の痛みの疾患、ストレス性の自律神経不調症状、老化退行性疾患、表在性化膿性疾患に対する治療実績を積み重ね、会員自身はもちろん家族の健康保持に、蜂針療法をいかに役立てるかを研究、研鑽しているところである。

また一部の研究会員は昭和5年地方庁令で認められた『みつばち刺激療法』療術師の復活を願って(戦後マッカーサー指令で廃止された)療術師部会という組織を作り療術師業で身を立て(職業選択の自由)近代医学の盲点とされる、前記諸疾患に悩む多くの人たちに光明をもたらそうと、より深い研究とその普及のため努力を重ねている。

すでに中国では国家公認の『みつばち蜂針治療師制度』ができて、堂々の営業を始めたこと聞

く、さすが自然科学と自然医学に根ざした中国伝統医学のお国柄、蜂針療法に対する理解度も深くまたその対応にも素早いものがあったことと誠にうらやましく思う次第である。

近代医学はその診断学において急速な進歩を見たが、その治療学は必ずしもすべてをカバーできない。その一面を補助するために東洋医学(アンマ、マッサージ、指圧、鍼、灸、柔道整復)などの職業がしかるべき学業を経て国家試験に合格して公認されている、しかし多彩な病気はこれらをして完全にカバーできないため、その他の療術(カイロ、整体、電療機器、光熱光線、刺激、暗示、宗教、気功、その他)を求める者が多いのが現実である。その原因は、薬の副作用、薬害、無効、医療への不信感などにあるといわれて久しい。また近代社会生活は豊かになった反面、環境、食品、対人関係などでストレスが蓄積しやすいということがあって原因不明の不快症候群(自律神経障害)に陥って悩む者が増加し、さらに高齢化人口の増加で痛みの疾患に悩む老人達が増加していることなどから、その他の『療術師』の門前が賑わいを見せているといわれる。

蜂針療法もその他の療術師の仲間であるが蜂の針に刺されると聞くと、一般からは敬遠されがちで、蜂針療法で健康を取り戻した友人の強い勧めで、恐る恐る訪れるか、あらゆる治療や様々な療術を試み、その結果満足する治療効果が得られなかった時、最後の手段として(蜂の針でも)相当の覚悟を決めて、蜂針治療所を訪れるのが常である。日本人は有史以来わが国特有のスズメバチ類に散々と痛めつけられてきた経緯があるから、蜂の針と聞いただけで強い

表1 蜂針療法の適応疾患

各種神経痛	三叉神経痛・偏頭痛・常習頭痛・後頭部痛・歯痛・頸肩痛・五十肩・背部部痛・肋間神経痛・各種腰痛・ぎっくり腰・椎間板ヘルニア・坐骨神経痛・ヘルペス性疾患の後遺痛
炎症性疾患	関節リウマチ・関節炎・膝の水たまり・蓄膿症・歯槽膿漏・扁桃腺炎・筋肉の炎症・腱鞘炎（パネ指）・神経性皮膚炎（帯状疱疹ヘルペス）・他の疱疹ヘルペス・耐性菌による中耳炎・スポーツによる筋痛め
各種こり症状	首すじのこり・肩こり・背脊部のこり・腰部のこり・大腿部のこり・ふくらはぎのこり・その他のすじ腫れ・筋肉痛
血行不良性疾患	顔面神経麻痺・手足の痺れ・めまい・むくみ・しもやけ・冷え性・痔疾患
化膿性・ウイルス性疾患	表在性のできもの・ニキビ・ヘルペス性口角炎・口内炎・ウイルス性各種イボ・神経性円形脱毛症・生殖器ヘルペス
自律神経失調症	常習不快感・ヒステリー・不眠症・イライラ・不安感・全身疲労倦怠感・生理不順・月経痛・神経性便秘・下痢・耳鳴り・冷熱感症・更年期障害・不定愁訴・性的不感症・乗り物酔い・頻尿・失禁・小便不利
その他	パーキンソン氏病・メニエル氏病・むち打ち症（頸椎捻挫）・仮性近視・耳鳴り・喘息・小児喘息・寝小便秘・捻挫・打ち身打撲の黒血の浄化沈痛・寝ちがいの頸部痛・そら手・つき指・本態性高血圧・老化予防・精力増強・不妊症・神経性胃炎・胃下垂・痛風・脳障害後のリハビリ促進・思考力減退

拒絶反応を示すので、日本の蜂針療法は技術水準も高く次に述べる病症に対して治病効果は他の追随を許さないと確信しているが、その普及は遅々として進まない現状である。

I 蜂針療法の適応疾患

表1に適応疾患を示す。この様な諸疾患や多くの障害に対し、蜂針療法は驚異的な効果を現す。特に近代医療で最も対応の難しいと考えられるヘルペス性神経皮膚疾患（帯状疱疹）に対する即効的効果は素晴らしい。また自律神経不調症状、リウマチ性関節炎、さらにはウイルス性イボなどに対する蜂針療法の効能効果はノーベル賞ものである。

II 蜂針療法はなぜ効くのか

蜂針療法がなぜ確実な効果をもたらすのか？私にとって、永い間の疑念であったし、解明しようとする努力も重ねてきたところである。幸い本誌『ミツバチ科学』を愛読する機会を得たことでその疑問が少しづつ氷解しつつある。まだ仮説と言うには筋立てが不十分で論理も成り立たないが次の様に考えてみた。

私たちの身体は、糖、蛋白、アミノ酸、ペプチド類、脂質、ミネラル、空気、水、酵素、ビタミン等々の分子物質の分解、組み立て、協調の働きで生命を維持し、その健康を保ち、生き永らえることが基本にあると考える。

一方ミツバチの世界も植物由来の前記物質を主体として、生命を維持し4,200万年もの昔から（人類の発生は300万年位とか）変わらぬ姿で、その生命活動を続けてきたのである。御承

知の通りミツバチはその生産物のすべて、さらには蜂毒まで、私たち人体の健康生活に微量で役立つ有効成分の提供者として、つまり私たちの最も身近にあってアミノ酸、蛋白、酵素、触媒など天然活性物質の提供者として存在してくれていたのである。

ハチミツ、ローヤルゼリー、花粉荷、蜂ろう、蜂の子、プロポリス、蜂毒などの成分組成については多くの諸学者の手で解明され私たちの健康にどのような役割を果たしているか、一般にも多く知られているところであるが、蜂毒の成分と私たちの健康との関わりについては、残念ながら、まだ一般的ではない。ここにその成分について私の考えを申し述べ、蜂針療法の効能について理解が深まれば幸いと考えてみた。セイヨウミツバチの蜂毒（蜂針液）の構成成分については、およそ表2の通りとされている。

以上の成分中、ヒスタミンの働きは血管拡張作用を有し平滑筋（子宮筋、腸管など）の収縮作用、胃酸分泌促進作用がありさらに血圧降下作用と血行促進作用があるという。肩こりや本態性高血圧症の解消はヒスタミンがその主役と考えられる。しかしヒスタミンは皮膚の肥満細胞

表2 ミツバチの蜂毒の成分

物質群	成分名
アミン類	ヒスタミン、ドーパミン、ノルアドレナリン、セロトニン
ポリアミン類	プトレッシン、スベルミジン、スベルミン
活性ペプチド類	アバミン、メリチン、MCDペプチド、ヒスタペプチド
活性酵素	フォスフォリパーゼA2、ヒアルウロニダーゼ、コリンエステラーゼ
含有元素	鉄、ヨード、カリウム、カルシウム、マグネシウム、マンガン、銅、硫黄、塩素、亜鉛

に感作し脱顆粒を起こし一過性のカユミを起こす本体である。体質によるが耐久性以上に蜂針液を多量に注入すると蕁麻疹症状となることがあるから日本蜂針療法研究会では蜂針療術にあたっては、深刺しを堅く禁じ蜂の針は必ずピンセットに抜き取って使用するよう勧めている。

さらにドーパミンは私たちの脳、神経活性伝達物質として知られ、脳の A 系列神経では多量に分泌、消費される物質で特に脳前頭連合野では、多量に使用され、覚醒、意欲、知能、記憶、行動、創造、快感、沈痛等、精神感情を活性化、特に創造力をかきたてる重要な物質であるといわれる。また運動神経系（49 神経系）でドーパミン不足が生じると運動失調となりパーキンソン病が発生することが知られている。

ノルアドレナリンはドーパミンとは兄弟物質で私たちの脳や交感神経系で多量に分泌、消費され私たちの行動活力を促進する物質として知られる。脳の中では A 系列の下位 A1～A7 系列で活動し、さらに全身の交感神経系の活性液性伝達物質として重要な役割を担っている。特に A 系列第 6 神経系では覚醒、学習、鎮痛、排尿、血液循環、ホルモン系の調節、体温の維持、無意識活動など人体生命の根源に関わる脳神経系の活動促進物質といわれる。ノルアドレナリンの不足は交感神経系に混乱を生じ自律神経不調症状特有の、めまい、頭痛、肩凝り、便秘、

排尿異常、冷・熱感症、喘息、不安感、イライラ、など特有の症状に悩まされることになるといわれる。この様な不快症状の発症時、蜂針療法を行うと、その不調・不快症状は見事に雨散霧消する。蜂針液に含まれるノルアドレナリン作用で脳神経系が活性化した証拠であろう。

セロトニン（5HT）も脳神経物質の一つで脳内の B 系列神経から全脳に向かって分泌される物質だという。先の A 系列神経の過剰活動を抑制する働きを持つといわれ、つまりドーパミンやノルアドレナリンの過剰活動を抑制するブレーキ役を担っている。また血液血小板にも含まれ血管が損傷を受けた時、血管壁の平滑筋を収縮させて止血に役立つ作用もあるという。人体は脳神経活動の促進と抑制という両物質を自ら生産して生命をコントロールしながら創造、学習、記憶、歴史、文化を築いてきたといわれるが、セイヨウミツバチ蜂針液にはこれと同様の生理活性物質を含み、その刺針（消毒済みの注射針）で私たちの自律神経不調症状改善に役立てることができるとは、まさに天の配剤の妙としかいいようがない。これらの外ペプチドホルモン、活性酵素、元素など微量有効成分が多数含まれ白血球増多作用、鎮痛消炎作用、細胞膜の界面活性作用、抗酸化作用など万能薬的作用をもって私たちの抗菌自癒力を活性化してくれるものと考えられる。蜂針療法はモルヒネのような依存中毒性をまったく生じない、また強力な殺菌（化膿菌、ウィルス）作用を持つが耐性菌を作らないなどの素晴らしいメリットを持つ。このことは長年の蜂針療法治療現場から確信を持って申し上げたい。



図1 頸肩腕神経群を犯すヘルペスの症状
胸の赤みはヘルペスとは関係のないもの



図2 肩甲部皮膚面に現れたヘルペスの症状

わが国に、セイヨウミツバチが持ち込まれてから、120年程度となるがまだまだ一般のミツバチに対する認識度は低いものの近年は健康とミツバチ生産物、健康と蜂針療法、特にプロポリスに対する関心が急速に高まりつつある。ハチミツは戦中戦後の砂糖の代用品的感覚がまだ残っているのか、その需要は足踏み状態の様であるが蜂針療法を武器にプロポリス、ローヤルゼリーの売り込みに成功している日蜂針研究会員の噂をよく耳にするようになってきたので研究会の創立にかかわった一員として陰ながら喜んでいる。蜂針療法は蜂に刺されるという恐怖心があるので最後の手段と思いついて訪れる者が多いからその治病効果の結果に驚きと特段の信頼を得ることができる。養蜂生産物に対する信頼度も自ずから高まり一挙両得という結果になっているようである。高齢化社会の拡大につれて痛みの疾患は増加の一途をたどろうことから今後の蜂針療法の需要は高まるばかりであろう。特に老人達は蜂針後の赤発・かゆみ等の発生が少ないなどの特徴もあるからぜひ勧めたい。

Ⅲ 带状疱疹の治験例

带状疱疹ヘルペスは近年高齢化社会と共に、さらに癌などの体力低下時に疱疹ウイルスに犯される例が大変多くなったと聞く。疱疹ヘルペスに罹ると障害を受けた末梢神経分布野に火傷状の皮膚障害と、えも言われぬ劇痛が走り夜も眠れない程の日が続く。目下のところ特効薬もない。火傷状の皮膚障害は5~8週間位で治るが、その痛みは数年も取れないことが多い。特に三叉神経が犯されると長期に渡って(7~10年)苦しむ例が多い。主として带状疱疹ヘルペスに犯されるのは三叉神経のほか頸椎から出ている頸・肩・腕神経群胸椎から出る各助間神経・腰椎から出る腰神経・大腿神経・座骨神経などが主として片側性に犯される。また犯された神経の支配領域に火傷状の皮膚炎を伴うのが特徴である。

図1は左側の頸椎5~6~7胸椎1間から出る頸肩腕神経群がヘルペスに犯されたもので、図2は同神経系の肩甲部皮膚面が同時に犯さ

れていることを示す。この症状に対する蜂針治療点は皮膚障害部分に散刺すると共に患側頸椎の横突起間神経根部に軽く刺すことで解決する。夜も眠れぬ程の劇痛も2~3回の蜂針で嘘の様に寛解する。ただし皮膚障害が完治するまでは相当の日時が必要である。さらに他の治療を受けて皮膚障害が治り痛みだけ残った場合も数回の蜂針で痛みを完全に消すことができる。

終りに臨んで、標題にセイヨウミツバチとしたことで一言触れておきたい。わが国古来のニホンミツバチが各地に存在するが、この蜂を蜂針療法に利用しても、セイヨウミツバチと同じ治病効果を期待できないといわれる。その原因は蜂針液の成分の違いにあると考えられる。両者の明らかな違いはアミン類・ペプチド類の含有比率である。ニホンミツバチにはセイヨウミツバチの半分または3分の1以下という量的な違いがあり、さらにヒスタミンは極く微量、セロトニンやMCDペプチドは不検出ということである。この様な生理活性物質の含有比率の違いが治療結果に現れたものと考えている。日蜂針研究会のある会員がニホンミツバチを、肩こりの治療に使ったがまったく効果がなかったと聞いた時さもあらんと思った次第である。ニホンミツバチを持たれる方に追試をぜひお願いしたいと願っている。

(〒056 北海道静内郡静内町御幸町6-3-26)

参考文献

- 大木幸介. 1989. 脳がここまでわかってきた. 光文社. pp. 159.
 太田直喜. 1991. 蜂針 21: 84-89.
 中島暉躬. 1983. ミツバチ科学 4(1): 9-14.
 井上秀雄・中島暉躬. 1986. 第30回国際養蜂会議録集録. 日本養蜂はちみつ協会. p. 473-475.

OHTA, NAOKI. Apitherapy with stings of honeybees, *Apis mellifera*. *Honeybee Science* (1995) 16 (2): 77-80. 6-3-26, Miyuki, Shizunai, Hokkaido, 056 Japan.

Recent status of the practical apitherapy in Japan is described here, with special references to its possible mechanism to heal various body disorder.